光悦謡本百番

光悦謡本百番

葵上

称号ハ朱雀院とそ申す帝は
臣下なかば楠も左大将清盛母
叢上の清物なるかゝ中に清盛は
雅にぞ貴僧高僧を崇し申せし族
ぞ大法秘法醫療さま〴〵の御手
まゐらせ更にそのしるしなし
ぞ愛ようて懐ひの神子と申て隠き

なきあづさの上手の候を召て
生霊死霊乃間をあづさにかけ
させ申せとの御事にて候程に
此由を申付ばやと存候
照りあはでひの神子を召て
参候へ
神子
天清浄地清浄内外
清浄六根清浄ど寄人見えばやう
よりくる長濱のあし毛の
駒に手綱ゆりかけ　みつの
車に乃里乃みち火宅の門をや
出ぬらん　夕顔の宿乃やれ車
やる方なきこそかなしけれ
浮世は牛の小車の廻るや
報ひなるらん　をよそ輪廻は

車乃輪のしとくど顔四まを出

やしひゞ人多かは不で芭蕉泡沫の

下

世のなしひ飛月かも無今月乃

遊め也霧うしねきうなろうの友於

勇かう我ふ人乃恨の猶うひて

忘れも居うぬ思ひざめんや

きりし戯むと椊比う多無具乃

見き歌志らぶや慈而し居

ゝとうもし流ひ車の歌ひのさ

上三ノ

月なはなりめあ果んともじく

ほよもはかへてしうけるふの

様乃う引うりしにより夜まさ

下

うふんを語んく　安流き流

遊児のなとえし流くろゞく

拍子下
あづまや乃も屋のつまどに
居たれども　姿なければとふ
人もなし　ふしぎやな誰とも
みえぬ上臈乃やれ車にめされ
たるに青女房とおぼしき人乃
牛もなき車のながえにとりつき
ざめ〳〵泣給ふ痛はしさよ

詞
もしか様の人にてもや候らん

大臣詞
大方は推量申て候ど唯はし〳〵きの
ぬなはのわく　それ娑婆
電光乃境には恨べき人もなく
悲しむべき身もあらざるに
いつさてうかれそめける世
ばゞに梓の弓になをとゞみびの拜て

歌もよみならはゞ成尭とり
思召けば我六条の中将の
無霊也歌は世に名をしりてん気
雲上には花の色めずる春のあし隠
仙遊よ在原仙洞の御遊には縁の
夜は月をたりふ我色をさそひ
り歌やりなわし劣なまさるとも

かと添へぬまとは槿の月影をは
まゝならぬなるとせくもよなわだくて心
なきさ歌んは帰り義理色の子敵の
ゞもて出そめし思ひの露が歌
恨み残りしきんとぞ乞き歌まで
出るなれ有　おりひまんや
世中乃情ハひと後すなかれ

上音
鵜飼人乃あはれつゝ實祈はづく
下
かなしけれ身も罪ぬなれば何を
数くる夢のうきみえよ
げにかなしくも悲しめしや
詞
げに見えつる大事かなひたまし
あらありがたやと衆乃法の功
誰の情ぞうそなわすもる

ここはや聞かん子ら
へ我たゞ思ひとまる者の人
げやげる川ぞ見えて見
うきふましとも花のうきわ
ちやまゆ宿たる仏上見とそ
立よわでまうそ悟り若鷹
みける身の悩み思ひ罪ひ

神子

はる乃隈はる老男哉ゝ事ハ

上月

おりひしや思ひ志き

うらめしの心や怠うらめし流

きうく禍やべ乃心かえ子ら源し富

ゞうふさまなう粉然ふ光ゞあへ

こゝ世ふまし　まのをさだくう起

きえんの限るるのきいわし

光君とうちききせ　わりりし

逢生乃もとあうきわし男悦

なるゑてゞ兼す御の露と消もをは

う我さん残まうつめしや夢ふ

うふ帰りぬ物をゑ頻ゑ蒼浪よ

あわぬまきはだ我も思ひのうらみは

りしかへてそ面影しかしや枕よ

今こそはやき東路の都めく旅

ゆふつく日の旅のあはれ

貴賤上下の袖の色よく

ゆかみ御座なとて桜川の

小垣を志やうして来里る人

九識のまとをいてす十乗の床を

[illegible]とは里[illegible]の法水をたゝへ

三界の月を澄しところに案内

申さんとはいかなる者ぞ

ワキ
是は[illegible]のあたりの者にて候

道も出しらん我大病より里る

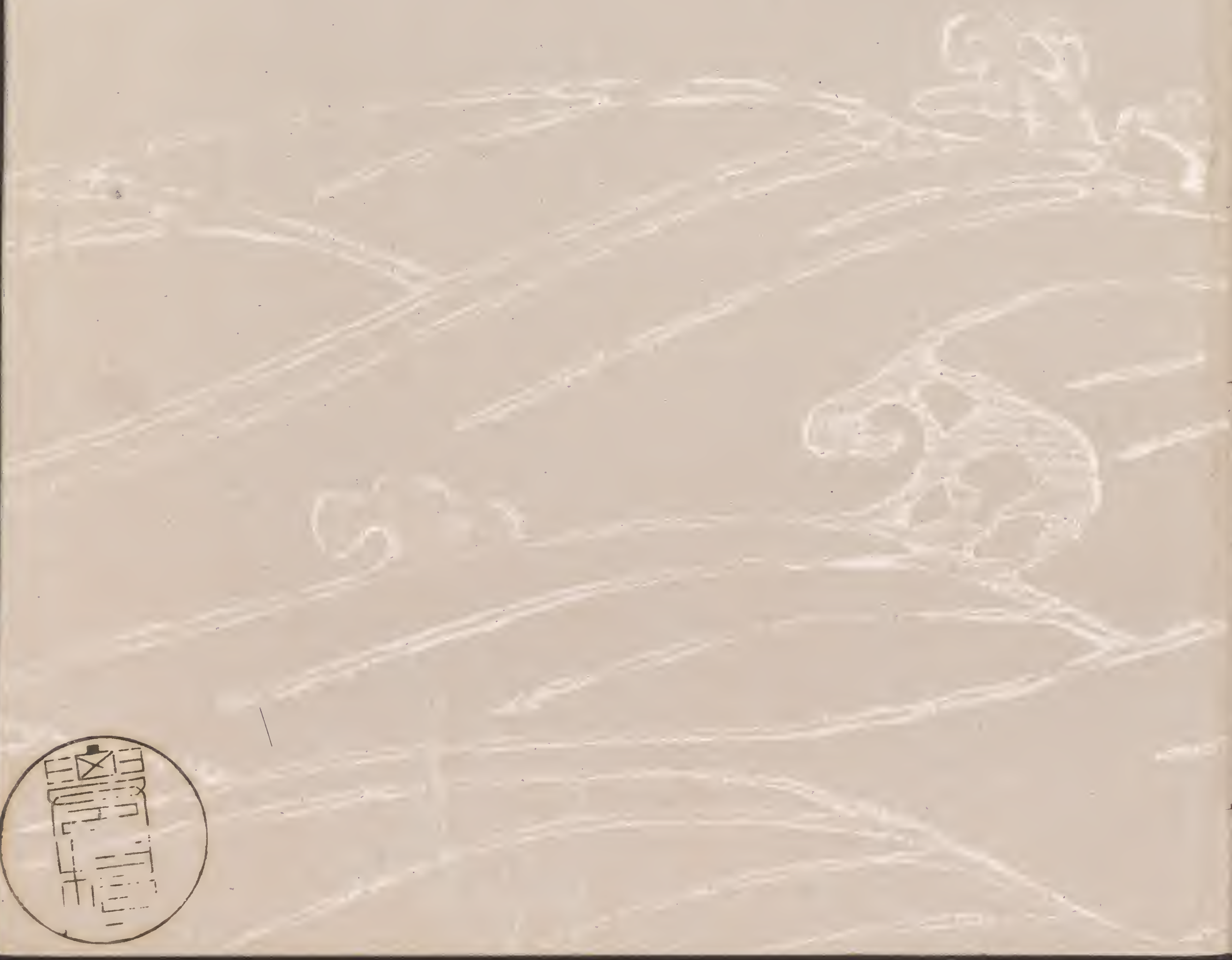
清使とは雅より和歌の名にて

まことにたゝ乃清出清太夫

ワキ
重き病人を頼くに

御座ろう　あまたの大床よ
内坐人　まうまかしおし
やさうしるまゝは　最てば
川老ハ加持よ下りしすこ役の
行者乃あとほうしほむ脂金両義乃
岩をわ老七寶みる露をうけし
篠越は不浄をへ之にて留魅辱の

蓑裟衣木乃数珠のいらゝう哉
ざれ室くさなしも母てびと
いのわきらいにの乃ほこし於暑後三
憂悩踏日羅敵　叫すれ老けや
の亀至るぶるのへらてかうのる
一修ふなれ　大ともいつり陀
悪霊なわともり行者の法力にして

へきりとざまて数珠を押もみて
ざ東方ハ降三世明王 南方軍
荼利夜叉 西方大威徳明王
北方金剛 夜叉明王 中央大
聖不動明王 曩謨三曼多縛日羅
赦ざ戦拏摩訶嚕遮那娑婆多耶吽
多羅吒干給ば我見者は大智恵

ば我心老良方成佛 あく
おりすし乃殺哭辞や 気とろ
怨霊ハおりまたもきたるまし
讒論の辞をきく時そつく悪鬼
ちゝ拘伐やりしけば属遂乃
あまて菩薩も爰にまさいまず佛
乃胀乃力と隊りうき紙なく